

平成25年度

第58回 長野県中学校連合教科研究会

国語科

I	研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	趣 旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名・・・・・・・・	1～2
IV	研究問題と協議内容・・・・・・・・・・・・・・・・	3～6
V	本年度研究会の反省と来年度の方向・・・・・・・・	7～8
VI	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	8

I 研究テーマ

一人一人が自ら学び、確かな国語の力をつけていく教材化と学習の評価はどのようにしたらよいか

II 趣旨

生徒の実態把握とつける力の決めだし。その上に立った素材研究と確かな教材化、指導研究を大切にしたい。
また、導入段階・追究段階・終末段階での評価をどのようにするか、生徒の具体の姿で明らかにしたい。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

- 第1分科会** 指導者 金井 直樹 先生（東信教育事務所主事）
 司会者 松澤智恵子 先生（長野市立東部中学校）
 記録者 細川 李花 先生（長野市立篠ノ井中学校）
 世話係 日比野 馨 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）
- 第2分科会** 指導者 吉越 秀之 先生（南信教育事務所指導主事）
 司会者 宮下 文一 先生（長野市立松代中学校）
 記録者 戸塚 拓也 先生（長野市立柳町中学校）
 世話係 市川 渚 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）
- 第3分科会** 指導者 村田 忠久 先生（北信教育事務所指導主事）
 司会者 羽田 真史 先生（長野市立信更中学校）
 記録者 坂口 香織 先生（飯山市立城北中学校）
 世話係 倉科 宗和 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）

【第1分科会】

野沢中	レポートなし	林 愛美
浅科中	自ら追究し、豊かな自己表現の出来る生徒を育てる学習指導はどうあったら良 いか ～自分の考えを表現する場面の設定と指導・支援の在り方を求めて～	高橋 亮
上田第三中	レポートなし	宮島 卓郎
諏訪南中	聞く・話す活動を通して、自分の思いや考えを伝え合える学習活動はどうあつ たらよいか	黒田 詩帆
茅野東部中	レポートなし	佐々木 亮
富士見中	自己の言語力と表現力を伸張するための基礎力を充実させる指導の在り方	大井 悠己
高遠中	友と考えを伝え合うことで、自分の考えを深めることのできるグループ学習は どうあったらよいか	瀧澤 輝己
長野東部中	司会者	松澤智恵子
屋代中	レポートなし	水野 真澄
長野東北中	伝え合う力を高めるための指導はどうあったらよいか —お互いの学びを交流しあう場面を活性化させるICT—	鈴木 欄奈
篠ノ井東中	記録者	細川 李花
広徳中	レポートなし	杉本 唯
附属長野中	互いの考えを比べながら話し合う力を高める指導の在り方	宮澤 雅法
附属松本中	知識や体験を根拠として、自分の考えを形成していく国語の学習	日比野 馨

【第2分科会】

浅間中	生徒一人ひとりが「できた」「わかった」と実感できる国語教室を目指して ～視聴覚機器を活用した、国語の「分かる授業」のあり方～	白藤 智也
上田第六中	「音声、文章表現を通して、ものの見方や考え方を深める国語の授業作り	田中 祐貴 峰村 舞
諏訪西中	「できた・わかった・つかえた」の学ぶ喜びと学力を育む授業改善 ～「教えて考えさせる授業」実践を通して～	竹村 真実
原中	相手や目的に応じて、自分の考えや思いを伝えていこうとする生徒の育成	松崎 未来
西箕輪中	子ども中心のための授業改善 ～支え合う学習・基礎学力の定着・言語活動～	原 猛
広陵中	レポートなし	大野 征二
信濃中	レポートなし	三澤 千夏
柳町中	言葉がもっている表現の力にふれながら、古典に親しむ生徒の育成	戸塚 拓也
松代中	司会者	宮下 文一
附属長野中	互いの考えを比べながら話し合う力を高める指導の在り方	市川 渚
信明中	表現の工夫や効果を意識し、自分の考えを明確に伝え合おうとする力を伸ばす 国語教育はどうあったらよいか	土屋 大輔
波田中	思考力・表現力を高める授業の構築 ～場面設定と学習活動の工夫を通して～	白鳥志津子
附属松本中	知識や体験を根拠として、自分の考えを形成していく国語の学習	久保 貴史

【第3分科会】

佐久中	レポートなし	下條 将
佐久東中	漢字提出ノートは必要か？	尾沼 暢彦
岡谷西部中	レポートなし	小林 るえ
永明中	生徒同士が関わり合いながら学ぶことで、他のよさを認め合い、仲間から学ぶ 授業	神津 紗季
阿南第二中	「一人ひとりが、確かな読みの力をつけるための授業改善」 ～生徒が生き生きと学べる（勉強＋遊ぶことができる）「単元をつらぬく言語 活動」の工夫を通して～	下井 慈
三岳中	学習したことを生かし、自分の感じたことや考えたことを発表し合いながら読 みを深めていくための指導はどうあればよいか	宮川はるな
丘中	自分の思いをわかりやすく伝える学習はどうあったらよいか	北澤 泰三
仁科台中	根拠を明らかにして考えを伝える力」を育む国語学習 ～事実を根拠とし理由を付けて考えを述べ合う言語活動を通して～	川船 一恵
豊田中	一人一人の生徒が主体的に取り組み、気持ちや意図を豊かに表現するための支 援のあり方	武田 雄一
飯山城北中	記録者	坂口 香織
信更中	司会者	羽田 真史
附属長野中	互いの考えを比べながら話し合う力を高める指導の在り方	倉科 宗和
附属松本中	知識や体験を根拠として、自分の考えを形成していく国語の学習	熊市 真也

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会記録】

1 有効な「グループ学習」のあり方について

(1)協議して分かったこと、深まったこと

- ・「グループ学習を行うこと」が目的となつてはならない。国語科としてつける力を明確にし、その力をつけるための手立てとしてグループ学習を取り入れるべきだろう。
- ・グループ学習を行うとき大切にしたいのは、個々の生徒の間に生じる差異である。その差異に焦点を当てたとき、学びは深まり、集団で学ぶことの意義がそこに見出される。
- ・グループ学習の終末は、オープンエンドでも良い。ただし、叙述を根拠に理由を添えて、自分の読みを確立できているかどうかは、共通して評価すべき。
- ・グループ学習に付箋紙を用いることは、情報を取捨選択したり、共通点、相違点を見出しながら整理していったりすることができるという点で大変有効である。

(2)演習から明らかになったこと

- ・本分科会では、「有効なグループ学習のあり方」について演習を通して考える場を設けた。「竹取物語」の「燕の子安貝」のテキストをもとに、参加者が3つのグループに分かれ、生徒の立場に立って、「中納言石上磨足」の人物像を話し合った。演習を通して明らかになったこと以下に挙げる。
- ・話し合い活動では、自分の意見と友の意見、友と友の意見の間に生ずる「ズレ」を認識することが、生徒の学びの深まり、広がりを生む。意見交流の後に、「誰のどの叙述を根拠にした意見が、自分の考えにどのように影響したのか」を個々で自覚し、学習カード等へ書き込む時間が必要。そのことで、生徒自身によって、メタ認知的に意見の変容が自覚され、学びとして確立するのではないか。

(3)指導者の先生からのご指導

- ・グループ学習の場の設定において、授業者は常に「どのような国語の力をつけるべきか。」を問いながら、国語科としてつけたい力を明確に「言語活動」を設定していくべきである。近年、タブレット機器や拡大機等、ICTを用いたグループ学習も多く国語教室で行われている。ICTの使用についても、機器の使用そのものを目的とするのではなく、国語科として「つけたい力」をつけるための手立てとして捉えたい。
- ・ICTの多用により、「鉛筆で文字を書く」という機会が減少する可能性がある。「紙に鉛筆で書く」ことでしか得られない良さもあるので、留意が必要である。
- ・授業を構築していく際、問題追究に対する生徒の「必要感」は重要だが、常に「子どもがやりたいなあ・・・」ということだけでは進められない。生徒が「楽しい」、やればやるほど「楽しい」と思える授業を設定すれば、必要感はその中に自然と生じてくる。単元全体を通して、学ぶことの楽しさを実感できるようにするために、「単元を貫く言語活動」の設定が重要である。
- ・(本分科会での演習に関して)グループ学習における意見交換では、「根拠となる叙述」と「自分の意見」の間にある「考えたこと」や「理由」を交流することこそが重要である。「目をつけた叙述が一緒でも、意見が違う。」「目をつけた叙述は違うのに、意見が同じ。」等、共通点と相違点を明らかにすることで、学びに広がり・深まりが生まれてくる。

2 「話す・聞く」話し合い活動が充実するための支援のあり方について

(1)協議して分かったこと、深まったこと

- ・「話すこと・聞くこと」の指導では、生徒が具体的なイメージをもって学習活動に取り組めるよう、言語活動のモデルを示したり、具体的な話型を提示したりすることが必要である。
- ・(「記者会見を行う」という実践について)実際の記者会見において、会見者は、「世間に伝えたい情報を伝えること」を目的として会見を行い、記者たちは、「聞き取った内容を新聞や雑誌、ニュース等で再構築すること」を目的として、知りたい情報を引き出すための質問を重ねる。記者会見を授業で行う際も、質問と応答を目的とするのではなく、その先の目的を設定することで、必要感をもって、質問と応答がで

きるのではないか。

- ・「話すこと・聞くこと」の学習では、目的や相手によって、内容は変わってくるため、目的意識と相手意識をもつことが重要となる。
- ・「話すこと」の学習ではなく、話す内容を練る「書くこと」の単元になってしまわぬよう、話すことの内容メモ段階では、キーワードだけ書いておいて、その部分だけ覚えて発表するようにしたい。

(2)指導者の先生からのご指導

- ・「話すこと・聞くこと」の学習では、モデルを示すことが大変有効である。子どもの参考となるのはもちろんだが、モデルを作成する過程で、その言語活動の難しさや、子どもたちがつまづきそうな点に気づくことができ、教材研究ができる。
- ・義務教育の最終学年である中学三年生においては、社会生活の中で言語を適切に使用できる力が求められている。指導事項をよく読み、3領域1事項でそれぞれ求められている言葉の力を着実に指導するようにしたい。「話すこと・聞くこと」においては、「話題設定や取材」と「話すこと」が統一されていることに注意したい。様々な場面に応じて話す力が求められている。
- ・(「記者会見」を行うという実践について)記者会見では、「話す側」「聞く側」どちらの立場に立つかによって、国語科としてつけたい力は異なる。つけたい力をしぼり、具体的な言語活動を設定していくことが必要となる。

3 単元を貫く言語活動の設定について

(1)協議して分かったこと、深まったこと

- ・生徒が、単元全体を通して、必要感をもって取り組めるような言語活動を設定するために、まずは、生徒をとりまく言語生活の様相を具体的に知り、生徒の問題意識を知ることを出発点として、単元全体を貫く言語活動を設定していきたい。
- ・「言語活動」を目的とするのではなく、「国語科」としてどういう力をつけていく授業なのかという視点をもって、そのための手立てとして「言語活動」を設定していきたい。

(2)指導者の先生からのご指導

- ・学習指導要領における指導事項によっては、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」「伝統的言語文化と国語の特質に関する事項」のうち、複数の領域を関連付けて指導したほうが良い場合もある。
- ・学習指導要領における指導事項の中でどの力をつけるかを明確にし、言語活動を定め、単元の評価基準を据えていく。最終的には、すべての子どもたちが遂行できるような言語活動を設定したい。
- ・学習指導案は、本来、授業者が自分の授業のためにつくるものである。「こんなふうになりたい。こんなふうになりたい。」という「子どもの願い」を「学習問題」とし、「どこに目をつけて、どうやって考えるか。」という「見通し」を「学習課題」として設定しながら、つけたい力とその手立てを明確にし、授業を具体的にイメージできるような学習指導案にしたい。

文責：長野市立篠ノ井東中学校 細川 李花

【第2分科会記録】

1 古典学習にかかわって

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・中学校3年間で学ぶ古典学習の導入的意味合いを、竹取物語は担っている。つまり、材とどのように出会わせ、材とどのように触れていくか問われる教材でもある。そのような意味で、現代と意味が異なる古語に着目したり絵という親しみがもちやすいものを見せてイメージを膨らませたりすることでつまづきを防ぎ、自ら古典に触れようとする姿につながるのではないか。
- ・和歌の言葉一つの解釈にこだわって生徒が追究していくような学習活動がなされていてよい。
- ・和歌の詞書を教師が創作したこと、生徒の生活文に模して創作したことで、古典に親しみを持ち、現代とつながるものを見出す手立てとなっている。

(2) 指導者からのご指導

- ・古典においても根拠と理由を述べながら主張（自分の考え）を生徒が求めていることがよい。ただ、これ自体が国語科としてつけたい力ではなく、つけたい力は学習指導要領の中にある。この学習指導要領で求められている力を高めていくために、根拠や理由を述べながら主張をすることが必要なのである。
- ・指導要領改訂に伴い、小学校で古典の文に触れている生徒たちであるということを踏まえて授業を構築していくことが、中学校教師として必要である。
- ・1年時の「触れる」、2年時の「楽しむ」、3年時の「親しむ」という目標は決して分断されたものではなく、一連の学習活動の流れの中で段階を追って変容していかなければならない。教師に求められているのは、このような流れを踏まえて、いかにつけたい力を明確にしながら日々の授業を実践しているかである。

2 「書くこと」にかかわって

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・グループで推敲するような際、個の評価がつけにくくなってしまいう場面が日々の授業の中で見られる。グループでの活動の際も、必ず最後は個に帰す学習活動を仕組むことが大切なのではないか。
- ・書いたものをその後どうしていくのか、何をしたいために扱ったのかといったようなことが、生徒にもわかるようになることが大切である。また、相手意識をもつことで書く内容も変わってくる。相手に応じたものを書くためには、自身も持っている情報をどう表現したらいいのか思考する必要観が出てくる。そういった展開を仕組んでいきたい。

(2) 指導者からのご指導

- ・例えば、2年生に向けて修学旅行先のおすすめの場所パンフレットをつくらうという単元があったとする。ここでつけたい力は、そのパンフレットをより素晴らしいものにするというものではない。つけたい力を明確にすることや、単元の導入の際に生徒に見通しをもたせて、生徒自ら主体的に学びを積み重ねていくことが大切である。
- ・「わかりやすいパンフレットをつくらう」という目標では、生徒はどのようなパンフレットをつくることのできたら、目標を達成することができたか判断ができない。わかりやすいとは何か、言葉を割って教師が示さないといけない。
- ・書くプロセス（書きたいものが決まる→材料を集める→数ある材料の中からふさわしい材料を選ぶ→構成を決める→記述をする→校正をする）は基本的に同じだが、目的が異なれば中身や仕上がりの様式は異なってくる。

3 必要感をもって追究を深めていくための導入の工夫

(1) 協議されたこと

- ・どうしたら「江戸からのメッセージ」という材に必要感を抱いて出会えるか、どうしたら文中で指摘されている「心の豊かさ」ということに対して教科書だけでは飽きたらず、ほかに根拠や情報を求めて追究し続けることができるか。教師の材との出会わせ方が問われる。
- ・図や表が用いられている効果を探る上で、視聴覚機器を活用してみるのも面白い。

(2) 指導者から

- ・授業にいかせる素材は日常にあふれているが、それに気付く教師の目というものが問われる。また、過去の学びがいかされることも大切で、学年学期をまたいだ系統的な学びを教師が構築しなければならない。

文責：長野市立柳町中学校 戸塚 拓也

【第3分科会記録】

1 漢字提出ノートは必要か

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・提出状況で生徒の国語へ向かう意欲が量れるため漢字練習を行った方がよいという意見が多数だったが、漢字だけにとらわれず自ら家庭学習を選んでもよいとの意見もあった。
- ・漢字練習する意義に気づかせ、動機づけしたい。練習した漢字を小テストで出題したり、生徒と家庭学習に

ついて話し合ったりするのもよい。

- ・漢字練習することで、漢字を書く力をつけるだけでなく硬筆書写の役割も果たす。きれいに書くこともよ
りも丁寧に書くことを指導したい。ノートの使い方は工夫し、統一したい。
- ・課題は、漢字練習の状況を評価に加味するかどうか。

(2) 指導者からのご指導

- ・生徒が漢字練習することへの必要感と有用性を感じることができるとよい。そのためにも授業とリンクさせ
て行うことが大切。
- ・評価に加味するかということについては、原則として加味はしない。しかし学校の判断で「関心・意欲・態度」
に加味する場合には生徒・保護者が納得できるように説明をする必要がある。

2 文学的文章を「読むこと」の指導について

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・生徒が間違った読み取りをした場合、教師が「そうではないのでは？」と問いかけてよいのでは。教師が問
題提起し、生徒に個人やグループで考えさせるとよい。

(2) 指導者からのご指導

- ・文学的文章を読むとき葛藤場面を生徒に考えさせることはあるが、その場面を吟味する必要がある。またそ
の場面に至るまでの登場人物の叙述を追うことで心情が読み取れる。
- ・本時につけたい力を明確にすることが大切。指導要領解説を読み、各学年でつける力を意識する。

3 ペア学習・グループ学習の成果と課題

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・小グループの中でも他の生徒の意見に流されてしまう生徒がいる。個人追究の時間をとり、個人の考えをし
っかりもってからグループ学習に臨む必要がある。
- ・必要感と目的意識が大切。意欲をもてるような題材を選んだり、話し合う観点を設けたりするとよい。また
多様な考えが出るような教材や問題提起を用意しておくこともよい。

(2) 指導者からのご指導

- ・ペア学習・グループ学習は目的ではなく考えを広げたり深めたりするための手段。目的意識と話し合う観
点が必要。

4 単元展開の工夫について

(1) 協議して分かったこと、深まったこと

- ・学校行事と授業をリンクさせるような単元展開など、生徒の生活と結びついた単元展開はよい。
- ・単元の中で目的意識がもてるとよい。
- ・単元を考えるときは生徒につける力を明確にし、教材に合った単元展開を工夫したい。

(2) 指導者からのご指導

- ・単元を貫く課題解決的な活動を考えることが大切。単元の指導事項を見極め、ふさわしい言語活動を選び、
生徒につける力を明確にして指導過程を構築すること。
- ・書き方を学ぶために文章を読んでから書くというような、習得と活用ができる単元展開はよい。「書き方を
学ぶために読むのだ」という目的意識をもって読むことができる。文章の特徴を教材研究して授業を実践し
ていく必要がある。
- ・小学校でも学んできた古典を中学校でどのように実践するか。どの領域からも学ぶことができるので、単元
を工夫していきたい。
- ・教材研究を欠かさない。単元を工夫し、生徒の主体的な学びを促したい。教師主導型の授業ではなく、生徒
が思考・判断・表現できる授業づくりをしたい。単元だけではなく1時間の授業の中でも「ねらい・めりは
り・みとどけ」を意識することが大切。
- ・観（生徒観、教材観、指導観）を磨くことが大切。

文責：飯山市立城北中学校 坂口香織

V 本年度の反省と来年度の方向

◎本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ○「一人一人が自ら学び、確かな国語の力をつけていく教材化と学習の評価はどのようにしたらよいか」 ・いかに焦点化して評価しなくてはならないかが分かり実り多かった。「一人一人が学び」ことについても実践から学べればよかった。 ・最も学びたいと考えていたことなのでありがたかった。 ・全県テーマは今後も引き継がれていくべきものだと思う。教材で何を教えるか今後も全県で考えていきたい。 ・全体学習の中でいかに個人が自ら学ぼうとする意欲をもち、学力をつけていけるか一番の課題だと思う。だからこそ明らかにしていきたい。 ・各校で深められるポイントがあり、よいと思う。 ・生徒に力をつけるためにどのような評価をするのかはとても大切なのでよかった。 ・様々な角度からはいれるのでよい。 ・「確かな国語の力」は、ぼんやりとしかイメージができていないので具体的にどのような「手だて」にすればよいか勉強になった。 ・とても共感できるテーマでよかった。特に、評価についてはさらに研究を深めていきたい。
○研究の方向について	<ul style="list-style-type: none"> ・将来につながる研究となった。 ・自身の研究で学習の評価が曖昧であることが分かり、よかった。 ・子どもの目的意識の大切さを再認識しました。 ・それぞれのレポートがテーマとつながっていてよい。
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の心遣いがありがたかった。挨拶がすばらしかった。 ・一校ずつを扱う司会計画でよかった。 ・各領域の学習内容に関わる教材化について、それぞれの学校で行われた授業を中心にレポートにまとめられていて、勉強になった。 ・レポート数が多く、内容が濃いレポートが多いので時間をかけて扱いたい。 ・このような機会は大変、重要である。 ・多様な実践に触れられるよう、工夫して会が進行されていた。 ・深い議論に至らないところがあった。自分の指導の核になるものがないと、話し合いにならないことが感じられた。 ・和やかな雰囲気の中で意見交換ができるのでありがたい。 ・今年度初めて参加させていただき、他の先生方の話を聞くだけでも収穫があったと感じた。 ・日頃の実践の悩み等を聞く時間なども設けて、若い先生方にとって収穫のある研究会になるよう工夫されていた。 ・少人数の分科会なので、多くの先生方に発言する機会がありよいと思う。 ・分科会の中に内容が同一話題で討議できてよかった。
○レポートの書き方について	<ul style="list-style-type: none"> ・レポートの書き方について、まとめやすくよいと思う。 ・書き方の例があつて、わかりやすかった。 ・実際の授業、そこから学んだこと、学びを生かした実践まで書けるようにしたらより深まると思う。

○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・大変細やかにしていただけてよいと思う。 ・世話係の生徒の対応がしっかりしていて感心しました。 ・メールを使用しての文書送付やレポート提出はよかった。 ・ホームページに掲載されていた情報が見やすくてよかった。 ・予めレポートをいただけるとありがたい。
--------------	---

◎来年度に向けて

○来年度の研究テーマ	<p>○「一人一人が自ら学び、確かな国語の力をつけていく教材化と学習の評価はどのようにしたらよいか」（継続の方向）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続してよい。 ・本年度のテーマに沿ったものでよい。 ・幅広い観点からテーマに迫っていけるように思うので継続でよい。 ・「一人一人が学びを実感できる授業づくり」 ・「単元をつらぬく言語活動の設定」 ・「グループ活動」ということが話題になったが、個から集団へとどのようにつないでいくか研究してみたい。
○来年度の研究の方向	<ul style="list-style-type: none"> ・継続でよい。 ・本年度のように、生徒の実態に合う内容、具体的な実践を教えてほしい。 ・「書く」、「読む」、「話す、聞く」つけたい力を明確にしていきたい。 ・学習指導要領に基づき、多様なレポートが集まるとよい。 ・ワークショップ形式で行いとてもよかった。 ・評価に焦点を絞った研究も必要だと思う。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に分科会の学校の研究内容や課題等が分かっているとよいと思いました。 ・討議計画をもう少し早くいただけるとそれに沿って発表点を絞って準備できる。 ・駐車場の位置が分からなかったので、前もって連絡がほしい。 ・もっとベテランの方が多く集うような会であってほしい。そこに若い先生が集まり、勉強の場とさせていただくようなものにしたい。

VI あとがき

懇談会の準備や研究のまとめなどお忙しい時期に、県下各地から、34校、35名の先生方にお集まりいただき、日々の授業実践をもとに、生徒の学ぶ様子を通して、指導のあり方を熱心に討議していただき、本年も多大な成果を収めることができました。

お忙しい毎日にもかかわらず、終日にわたって全参加校の研究内容と今後の方向についての的確なご指導、ご助言をしてくださいました。指導者の金井直樹先生、吉越秀之先生、村田忠久先生、レポートをくまなくお読みいただき、綿密な司会計画により協議を深めていただきました司会の松澤智恵子先生、宮下文一先生、羽田真史先生、また、当日の記録及び研究集録のまとめに多くの時間を割いてご尽力いただきました記録の細川李花先生、戸塚拓也先生、坂口香織先生に心より感謝申し上げます。そして、お忙しい中、日々の実践をレポートにまとめ、熱心に協議に参加され、研究会を実りあるものにしてくださった参会の先生方に心から感謝申し上げます。

来年度も多くの先生方が参加され、国語教育のあるべき方向を求めて、より有意義な研究会にさせていただくことを願い、また、先生方の今後の一層のご活躍を祈念申し上げ、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

委員長 宮澤 雅法
副委員長 久保 貴史